

## 唐人屋敷の歴史的景観を活かしたまちづくりについて

石橋 佳奈

### I はじめに

長崎は鎖国期における唯一の海外貿易港だったことに知られるように、海外との交流の歴史は長崎を特徴づける要素の一つである。長崎市館内町に位置する唐人屋敷跡は、日本と中国の国際交流の貴重な歴史的資産であり、かつては旧オランダ人居留地の出島に比べてあまり知られていなかったが、出島の一部復元が終わり、近年、歴史都市長崎の地域振興の一環として、市や住民の関心が唐人屋敷にも向くようになった。長崎市では、歴史を活かしたまちづくりとして「唐人屋敷顕在化事業」を進めている。今回の現地調査では、この唐人屋敷の歴史的景観を活かしたまちづくりの取り組みについて、観察調査と関係者や地域住民への聞き取り調査を行った。調査の結果をもとに、この地域の景観行政の現状と対策について考えてみたい。

### II 対象地域の概要

#### 1. 館内町について

長崎市は既成市街地の約7割が斜面市街地という「坂のまち」である。もともと田畑であった所に、1960年代頃から細い畦道にそって低い方から住宅が立ち並んだ。当時は車道の必要性も低かったため、結果的に車が入れない市街地が形成されていった。日常の上下移動や防災面の不便さにより、若い世代を中心に人口流出が進み地域の活力低下・高齢化が進行した。

館内町もこのような斜面市街地特有の問題をもつ地域である。表1に長崎市と館内町の年齢別人口を示した。これによると、65歳以上の人口が長崎市では約2割であるのに対して、館内町では約3割を占めており、高齢者の割合が高い地域であることがわかる。

#### 2. 唐人屋敷の歴史について

唐人屋敷は、1689（元禄2）年、長崎郊外の十善寺郷幕府薬園に設置された。広さは約9,400坪、現在の館内町のほぼ全域に及ぶ（図1）。長崎市中には、近世初期に長崎に移住し、数代の間定住するうちに長崎の社会に欠かせない構成員となっていった唐人の子孫が多く居住した。唐人屋敷は、来航唐人によるキリスト教伝播を防ぐとともに、当時増加しつつあった密貿易への対策としてつくられ、それまで市内に分散して止宿していた唐人商人を収容することに目的があった。そのため、来航した唐人たちは、手回り品だけでここに隔離された。収容可能人員は約2,000人であった。また、新地には荷揚げした中国貿易品の蔵が設けられた。こうした唐人社会が長崎の中に存在したということは、経済的側面・文化的側面を中心として地域社会全体に奥行きと多様さをもたらした。

唐人屋敷はその後、1784（天明4）年の大

表1 館内町の世代別人口

	長崎市	館内町
総人口	442,699	511
15歳未満	58,932 (13%)	58 (11%)
15～64歳	283,492 (64%)	284 (56%)
65歳以上	100,034 (23%)	168 (33%)

注：下段は括弧内は、総人口に占める割合である。

資料：2005年国勢調査

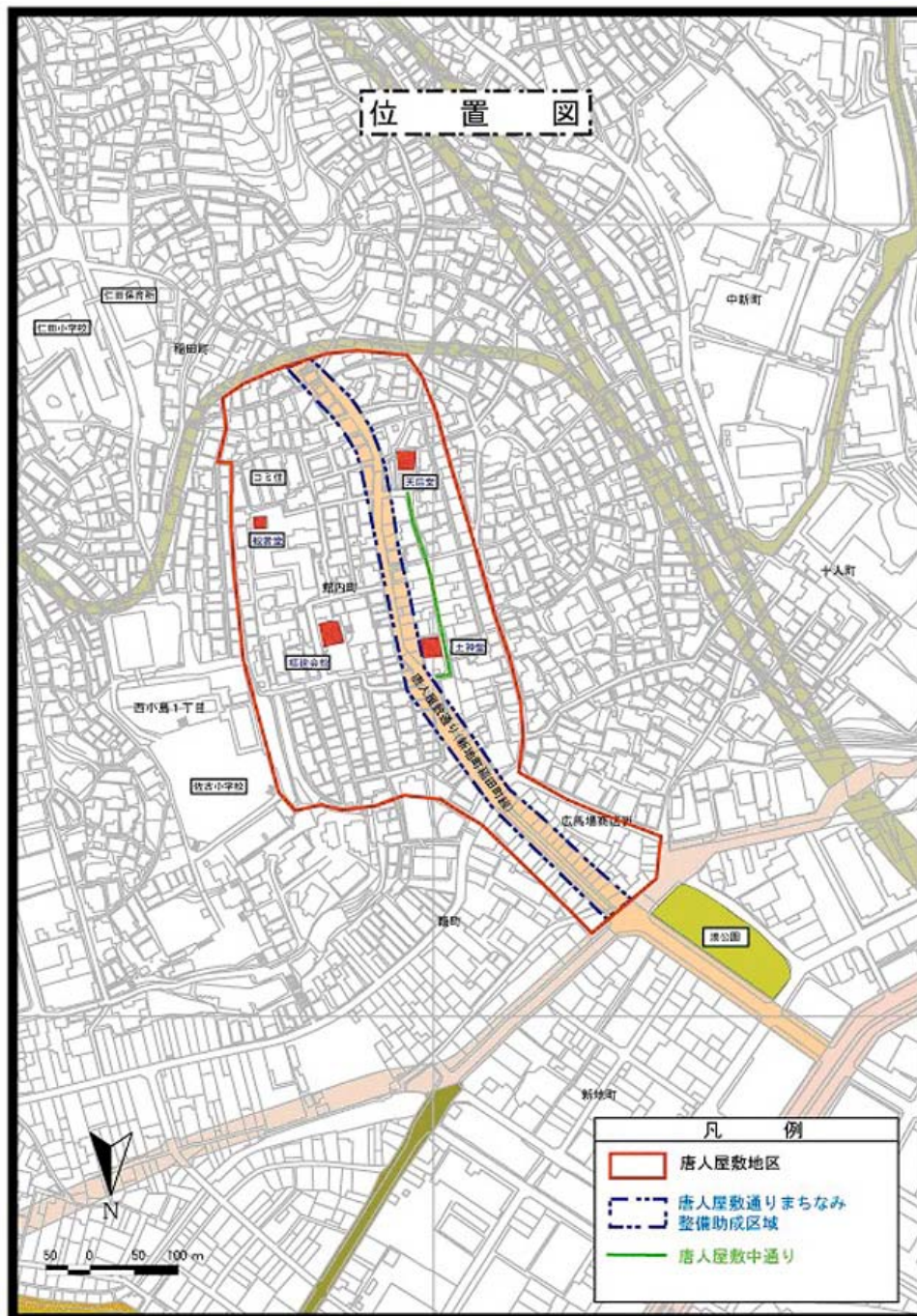


図1 唐人屋敷地区

出典：長崎県土木部まちづくり推進局景観まちづくり室ホームページより。

火により関帝堂を残して全焼し、構造もかなり変化したが、この大火以後唐人自前の建築を許されるようになった。出島と共に海外交流の窓口として大きな役割を果たした唐人屋敷は、1859（安政6）年の開国後廃屋化し、1870（明治3）年焼失した。

### Ⅲ 景観を活かしたまちづくりについて

#### 1. これまでの取り組み

館内町のまちづくりに関わる主体は、以下の3つである。

- ① 長崎市役所都市計画部まちづくり推進室
- ② 十善寺地区まちづくり協議会：住民によって構成されている。主な役割は、長崎市が実施するまちづくり行政に対しての諮問会議的なものや、ランタンフェスティバル唐人屋敷会場の運営などに関することである。
- ③ 唐人屋敷顕在化アドバイザー会議：長崎市が唐人屋敷顕在化事業の事業計画や景観等に対して意見を聴取するために任命した専門家会議である。

2000年末、「長崎市唐人屋敷跡活用検討協議会」から、まちづくりの基本方針となる「唐人屋敷跡の活用に関する提言」がなされた。その中で、唐人屋敷跡は貴重な史跡であり、長崎市の観光の面からも重要な場所であるにも関わらず、歴史的意義の顕在化に対する具体的な施策を欠いてきたとして、唐人屋敷範囲調査ならびに整備・活用に取り組むべきだと述べている。また、すでに唐人屋敷跡を抱える十善寺地区においては住環境整備、都市計画道路整備が進められていたが、この提言では、唐人屋敷跡の歴史的意義を踏まえた整備を図るよう主張している。

2001年度から、唐人屋敷顕在化事業として基本的な整備や建築物の修景整備が実施されてきた。その内容は以下の通りである。

まず、唐人屋敷跡の境界推定調査により、唐人屋敷の範囲を推定し、屋敷内の四隅にモニュメントを設置し（写真1）、遺構説明板・誘導サイン・案内板を設置した。4つの唐寺を結ぶ道に板石舗装をし、往時の唐人屋敷の雰囲気を感じられるように回遊路の整備を行った。

また、観光客や住民の憩いの空間として天后堂前広場を整備して多目的トイレやベンチ等を設置した（写真2）。さらに、福建会館敷地内の管理棟を改修して唐人屋敷さるく展示室を開設し、唐人屋敷の歴史、唐貿易、唐人の生活や催事等のパネル、発掘調査で出土した当時の茶碗類を展示している。

往時の雰囲気を醸し出すようなまちなみの形成を図るため、都市計画道路新地町稲田町線（唐人屋敷通り）と土神堂～天后堂（唐人屋敷中通り）において（図1参照）、沿道の建築物等の所有者等が行う新築や改修等のうち、唐人屋敷のまちなみ整備に寄与する修景行為について支援を行った。唐人屋敷（館内）地区は「和風中国風」、広馬場地区は大正時代に国際都市として賑わった長崎の代表的な地域ということで、「大正モダンレトロ風」のまちなみを目標として景観形成基準を示し、誘導している（写真3）。全体の助成限度額は1/2以内（400万円）である。

以下は修景基準の例である。

- ・和風中国風—欄干、格子戸、丸窓、丸柱、額縁の大きな看板、落ち着いた色彩、12m以下
- ・大正モダンレトロ風—ショーウィンドウ、レトロな書体、無彩色又は淡彩色、18m以下



写真1 四隅モニュメント



写真2 天后堂前広場





a. 和風中国風



b. 大正モダンレトロ風

写真3 修景した建築物の例

また、2006年度・2007年度の2年間に渡り「唐人屋敷中通りまちなみアートコンテスト」を実施し、2月のランタンフェスティバル期間中に市民による投票審査を行った。費用は市が全額負担して、施工を民間の業者に委託し、唐人屋敷頭在化事業アドバイザーによる指導のもと行われた。合計14軒の建物の正面を「和風中国風」に整備した（写真4）。

## 2. 聞き取り調査から

館内・広馬場地区のまちづくりに関わる人々数人に対して聞き取り調査を行い、それぞれのまちづくりに対する意見を聞いた。

〈長崎市役所都市計画課まちづくり推進室〉

住民の中にも温度差がある。唐人に対して偏見をもつ人もいる。景観整備を強制的に行うこともできるが、そうやって作った町に気持ちよく住めるだろうか。まちなみアートコンテストは、本格的に家を建て直す時のための意識づけをするという意味で実施した（所有者は素材を



写真4 唐人屋敷中通りまちなみアートコンテスト実施建物

提供しただけ。

〈十善寺地区まちづくり協議会・Aさん〉

細く入り組んだ坂道が不便な町なので、若い人は出て行き、住民は高齢者が多い。唐人屋敷通りは元々は沢山の人で賑わう商店街だったが、今は少数の店舗がのんびりやっていて、客は近所のお年寄りだけだ。整備して人が来るようにしたいという思いでまちづくりをしているが、住んでいるお年寄りは今ののんびりした雰囲気のままが好きという人もいる。

〈元唐人屋敷頭在化事業アドバイザー・Bさん〉

唐人屋敷頭在化事業の成果を急いで、まちなみアートコンテストを開催した。しかし事業にはなるが運動にはならず、成果が残ったとしても地域の活性化はできていない現状である。

景観形成の方針が長崎市全体に行き渡っていない。今までなされてきたのは専門家向けのアピールであり、市民に浸透していない。発信力が足りない。協議会が形骸化し、市とのやりとりがうまくいっていない。

〈自営業主・Cさん 60代〉

1948年からここに住んでいる。2004年に大正モダンレトロ風に改装した。

住民の間では約20年前から広馬場商店街活性化のために話し合いをしていた。後に長崎市の道路整備計画が始まったが、協力しない人がいて立ち退きが進まず、計画もうまくいかず商店もなくなっていった。住民と商店街組合と市の考えが三者三様で、方向性がない。商店街組合や自治会、まちづくりの総会も形骸化している。まちづくりは住民たちがまとまらなければならない。

〈自営業主・Dさん 40代〉

大正2年から、95年間商売をしてきた。今年4月に和風中国風のお店を新築した。お店の隣がお堂（唐寺）で、景観を壊さないようにしたかったので、まちなみ整備事業の助成を利用して建て替えた。アドバイザーと施工メーカーの意見をすり合わせて決定したデザインは自分たちの思い通りではなかった。しかし商売でこの地域にお世話になっているから、自分の意見を通すよりも地域の発展のために足並みをそろえよう、という思いで受け入れた。商売をやっていない人は、唐人屋敷のまちづくりを進めたところでメリットがないため、無関心だ。

長崎は観光のまちだ。文化財も豊かだし、お店が増えたら観光客も楽しめるようになるのではないだろうか。

〈自営業主・Eさん〉

2007年度のまちなみアートコンテストで店舗の正面を整備した。商店街が衰退し客も少なく、経営者は高齢者が多く後継ぎのいない店もあり、今さら改修に手をつける気にはならないものだ。また、景観整備は商売をしている人にとってはメリットがあるが、一般の居住者は中国人でもないのに中国風の家に住みたいだろうか。助成制度を利用せずに普通の家を新築した人もいた。地域の一体感がない。住民たちが変わらなければならない。

#### IV おわりに

唐人屋敷のまちづくりでは、これまで行政が主導して景観整備を行ってきた。調査を通して明らかになったことは、地域住民がそれぞれの立場（観光業との関わり）や年齢によって異なる考えを持っているということである。それらの景観・まちづくりに対する考え方の傾向を簡単に整理したものが表2である。

後藤氏は、その著書である『景観まちづくり論』（2007）の中で、地域固有の文化や生態系に基づく自律的な社会発展をめざす「共発的まちづくり」を提唱している。これは次の一連の取り組みによって進められる。

表2 年齢・立場によるまちづくりに対する考え方の違い

	店をもつ住民	一般の住民
～50代	積極的である。活気のある町にしたい。	(メリットがないため)あまり関心がない。
高齢者	歳をとってから、今さら取り組む気にはならない。	今の町のままでよい。現状維持。

- ・市民の自発的な運動の展開：新しい公共の誕生
- ・社会に開かれたまちづくり情報：社会資源の発見
- ・ネットワークの仕組みづくり：社会資本の形成
- ・住民自治と景観まちづくり：社会システムの創発（住民自治が団体自治を補完し、まちづくりの成果を景観として表現しながら、まちの経営に責任をもつ社会）

唐人屋敷の景観を活かしたまちづくりの場合も、まずは地域住民が身近なまちの歴史を振り返り再評価し、それに立脚したまちづくりの新しい方向性や将来像を共有することの積み重ねが必要ではないだろうか。行政と住民が計画段階からいかに合意形成をなし、まちづくりのための新たな価値観を共有していくかが重要である。また、地域住民の中でまちづくりを中心的に進めていくリーダーシップを備えた若い人材がいることが望ましいと考えられる。

謝辞 事前の準備から現地でのフィールドワーク、そして報告書作成に至るまでの過程で、お世話になった方々に感謝したいと思います。長崎総合科学大学の鮫島和夫先生、長崎市まちづくり推進室の金原様をはじめとする職員の方々、館内地区の住民の方々、また、家族や友人たち、ご協力ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

### 文献

- 後藤春彦 2007. 『景観まちづくり論』学芸出版社.  
 瀬野精一郎・新川登亀男・佐伯弘次・五野井隆史・小宮木代良 1998. 『長崎県の歴史』山川出版社.

### 参照ホームページ

長崎県土木部まちづくり推進局景観まちづくり室ホームページ(URL [http:// www.pref.nagasaki.jp/beautiful/050juten/image/060nagasakitoujinmap.jpg](http://www.pref.nagasaki.jp/beautiful/050juten/image/060nagasakitoujinmap.jpg))

